

東工大附属科学技術高等学校 教育後援会だより

第9号

2008.3.1 発行

同窓会の役割

（平成二〇年を迎えて）

芝浦工業会（本校同窓会）

会長 金子、聡



同窓会の役割

同窓会の基本理念は、「会員相互の親睦をはかり、母校の発展と工業の進歩発達に寄与すること」です。歴史を顧みると、明治一九年一月二一日に一橋大学の前身である東京商業学校の附設商工徒弟講習所職工科として母校の前身が創設されました。その後、東京職工学校、東京高等工芸学校、千葉大学東京工業専門学校などへの移管と改称を繰り返した後、昭和二六年四月一日に東京工業大学への移管により東京工業大学附属工業高校と改称されました。

この長い歴史の中、紆余曲折がありました。母校の同窓会として「芝浦工業会」が続いてきました。平成三年に、やや停滞していた同窓会が再発足し、母校創立一一〇周年（平成八年）に際しては、募金活動により母校体育館改築に伴う演台の寄贈を実施しました。さらに、機関誌の

発行、ホームページ、二年に一回の芝浦工業会総会と三ヶ月に一回の幹事会が定着しています。東京工業大学同窓会である蔵前工業会、専攻科同窓会である蔵前修工会との連携、PTAおよび教育後援会との協力も進めております。本校卒業生はこの三月には一三〇〇名を超え、広範な社会的分野で活躍しております。

母校も、一昨年度東京工業大学附属科学技術高校として再出発し、いよいよ三年目の完成年度となります。東京工業大学への推薦入学も、順調に伸展しており、すでに東京工業大学進学者の同窓会活動への参加があります。いよいよ資金的な援助だけでなく、豊富な卒業生の人的財産を生かした母校の支援が必要であり、かつ可能になってきました。そのことは社会的にも要請されており、学校運営における同窓会の役割が評価の対象となりつつあります。そして平成一六年より母校の評議員組織が発足し、現在八名の定員中三名が同窓会より選出され、母校の運営に対する助言を行っています。

同窓会の支援活動

具体的な支援活動として、卒業式において恒例となりました記念品贈呈には、毎回それぞれ卒業生の印鑑が用意されます。前に述べた一〇〇周年記念事業としては、二〇〇万円を越える寄付を集めて体育館に可動式の大きな演台を送ることができました。さらに、近年弟燕祭には、ブースを設けて芝浦工業会の宣伝や同窓の技術紹介などを行っています。

一〇〇周年以前に集められた寄付金を主体とする奨学制度が、芝浦工業会蔵前修工会奨学事業として続けられてきており、毎年度の始業式において成績優秀者に褒賞が贈られています。その時点の二年生と三年生を対象に前年度の成績によって選ばれ、例年一〇数名が該当します。名称の通り、専攻科の同窓会である蔵前修工会との共同事業で、当分続けられる財政状態にあります。今後、教育後援会とも協力して奨学制度を

拡充していく必要があると考えています。

母校教職員およびPTAとの懇親についてかの提言

最近の同窓会活動は、二年に一回の総会と三ヶ月に一回の幹事会が定例化していますが、いずれも母校の施設を使わせて頂いております。総会には、校長はじめ、教員OB等に来賓としておいで頂いておりますが、幹事会においても、夏と春に母校管理職とPTAを加えた懇親会が続いています。人事の変化にも対応できるよう懇親の機会を続ける必要があります。

このような機会も含めて、母校の動静に関心を持ち、可能な支援や提言を行ってきましたが、評議委員会という正式の場でもできました。校長を主体とする学校運営のご苦勞に対して、最近お伝えしたいくつかの提言の一部を披露致します。これは、あくまで参考意見で、こうあって欲しいという同窓からの意見です。

一つは、科学技術高校となったことと進学率高止まりの問題です。これは、学校運営上十二分に検討されて、工業高校を改訂したものと聞いていますが、工業高校時代にも永年の課題であった進学カリキュラムと実業カリキュラムのギャップが存在することを意味します。特に、英語の時間数は、普通高校に比べて少なく、他の科学技術専門教育科目の時間が進学に必要な科目の時間を圧縮していることは、十分配慮されているとは言え、今後も常に配慮していく必要があります。推薦制度が充実してきたとは言え、進学率が高く、科学技術専門校として常にバランスを取っていくことが最大の課題と考えられます。

英語授業の時間数の問題は、年々高まる国際化の流れと会話や文章を含む広い意味のコミュニケーション能力の涵養のために是非増強して欲しいと思っています。国際化については、校長をはじめとする学校の努力で今年度からアジア地区の高校との国際交流協定を結び、交流が始ま

りましたが、早々に交流の数を増やし、英語圏の高校を加えるよう提言しています。

もう一つは、科学技術の分野で近年顕在化してきている課題である倫理教育の強化です。東海村でのウランの臨界量を超える事故をふまえるまでもなく、社会全体として科学技術に倫理を加えて考える必要性が明確になり、技術士資格の資格規定にも継続した技術の研修と倫理の習得が盛り込まれています。したがって、科学技術者にも一般教養を含む有効な倫理教育を考える必要があると思います。

母校のますますの発展を祈る

卒業生として、私は昭和三四年工業化学科卒業ですが、現在の役員は昭和三〇、四〇、五〇年代が中心です。若返りと同窓活動への参加者増をめざして、幹事不在の卒業年次についてその選出依頼を進めているところですが、より多くの新しい幹事が加わる可能性が出てきましたのでご期待ください。また、卒業生から見ると、高い倍率を超えて、学区を越えて集まった母校の学生は、個性的教員と接することで独立心と深い専門教育と有効な一般教養を身につける伝統が残っていると思います。その伝統を背景にした自由な教育環境という気風を続けて欲しいものです。

長い歴史を持つ芝浦工業会としては、教育後援会ともども母校、東京工業大学附属科学技術高校のますますの発展に寄与すべく、努力する所存です。

(本校工業化学科卒・東京理科大学理学部教授)

第二回「フロンティアX」講演会

教育後援会会計監査 青木輝壽

演題 「アメダス・システムの開発とその後の業務」

（放送局における技術者の役割）

講演者 NHK仙台放送局技術部

チーフエンジニア 松林和彦氏（昭和五六年三月本校電子科卒）

松林氏は本校在校中に産業技術振興賞を受賞された成績優秀者です。卒業後NHK制作技術局に入局、青森放送局等を経て、現在は仙台放送局で主任技術者として活躍中です。慶応大学理工学部および大学院に職場から派遣され、研究を重ねられました。

一、講演内容（要旨）

講演は、放送技術者に必要な心得として、①倫理観②最新技術の習得③ニーズに応えることの三点を挙げることから始められました。

そして放送技術の開発例を挙げ、動画で具体的に説明されました。例えば仙台放送局の「ふれあい特集」では、「放送の舞台裏」の様子を紹介され、電子番組表による放送予約では、サービス向上に役立つこと、緊急災害情報の放送の仕組などが紹介されました。

「目で見る天気予報」では、松林チームが一九八三年気象庁のアメダス情報を、当時の汎用パソコンのCG画像で表現することにはじめて成功しました。

担当した主な番組として、一九八三年に連続テレビ小説「おしん」、一九九五年に日豪共同映画制作で、ハイビジョンカメラを使つての「最後の弾丸」、その時はオーストラリアのジャングルに二ヶ月滞在して撮影しました。開発当初のカメラは大型で重く、故障も多く修理しながらの撮影だったと苦労話をされました。その「最後の弾丸」の映像の一部を紹介されました。さらに中国の「故宮」の撮影や、日食と彗星の同時観測はモンゴルのゲルで暮らしながら、超高感度カメラで行ったなど興

味深いものでした。

学会活動として、一九九一年に「VODサーバーを利用した番組開発」というテーマで、それまでの放送技術の研究業績を米国の映像情報メディア学会で発表。一九九八年には技術振興賞を受賞されました。その他研究業績を映画テレビ放送誌に投稿するなど、執筆活動もされています。

今後の見通しとして、二〇一一年から始まるデジタル放送に関する取り組みや特徴について、データ放送の例としては津波情報システムや紅白歌合戦の投票率表示、スーパーハイビジョン構想、渋谷と川口を結ぶアーカイブスの機構などを紹介されました。

講演は「NHKの技術者に求められる放送技術者像」の話に戻って締めくくられました。

二、講演の様子と感想

二回目となる「フロンティアX」講演会は、本校「弟燕祭」当日（二〇〇七年一〇月七日）に実施されました。それは本校生だけでなく一般の方も大勢聴講に來られる事を期待したからです。六十数名の参加者が熱心に聴講し、大いに好評でありました。

松林氏は、多忙な業務の中を仙台から派遣されました。豊富な資料を駆使して熱心に講演されました。参加者は普段見られない放送技術の裏の部分をクローズアップして見聴きすることができ、感激いたしました。

三、講演のアンケート結果

アンケートは、「講演をどこで知ったか」と「内容」について質問した結果、聴講者のほとんどが生徒の保護者で、小・中学生が十名、一般見学者三名でした。本校生徒や職員は数名でした。

内容については、「非常に良い」、「良い」を合わせると七三%であり、好評であった。誌上を借りご協力いただいた方々に感謝いたします。

（本校元副校長）



2007年10月7日 本校1号館212教室

母校入学から現在まで

東京工業大学附属科学技術高等学校
科学・技術科(情報システム分野)

教諭 石川 幸 治

この度、活躍する卒業生に関する記事ということで原稿執筆の依頼を受けました。私には活躍といえるほどのものではありませんが、卒業生として本校のためにまじめに尽力しているつもりでありますのでお引き受けいたしました。拙い文ですがお付き合いください。

私は昭和六〇年に本校の電気科に入学しました。昭和最後の卒業生ということになります。今と違ってまだ学科別に入学していた時代で、担任は遠藤信一先生と後に竹内守先生、特別に悪いことはしなかったのですがそんなに迷惑をかけることはなかったと思います。

中学まで、作文と美術以外には苦手な科目は無かったですねですが、本校入学後は、いきなり数学の授業のスピードについて行けませんでしたが、しかし不思議なことに電気科の専門に関連する数学の内容は自然と後から理解できました。もし普通高校に進学していたら、私は進むべき道を見失っていたかもしれません。高校時代は、クラスメートとバンドを組んだり(フォークソング同好会・顧問・市村益男先生)、地元の合唱団に入ったりと音楽活動に没頭して、放課後はあまり勉強しておらず、自宅で行うのは実習レポートの作成と定期試験前の復習ぐらいでした。そんな私でも授業だけは真剣に取り組みましたし、試験前には放課後にクラスメート同士でわからないところを教え合う勉強会のようなことをやっていました。その甲斐あってか、地方の国立大学に推薦していただき、さらに電気電子・情報に関する勉強を続けることになりました。親元を離れて暮らしたのも今ではよい経験だったと思っています。

ところで、私はそれまで教員になろうとは露ほども考えたことはありませんでしたが、大学院就学中に、研究室に代々引き継がれてきた近隣の情報系専門学校での非常勤講師を務めた経験が、教職を目指す大きなきっかけとなりました。当時私の授業がわからないわかないと連発していた学生が、ある時「先生、今日の話はよくわかったよ」と言ってく

れたその喜びが、今でも忘れられません。それ以後、何とかわかってもらおうと、授業に工夫をするようになりました。

ところが、教員としての初めての職場となる某工業高専で教え始めた頃、あるベテランの先生(現在は別の高専の校長)から衝撃的な教えを賜りました。その先生は学生からの評判は決して良くは無かったのですが、曰く「学生に如何に思考の習慣を付けさせるか、わかりやすい授業を心がけるのももちろん大切だが、それで学生がわかった気になってしまつては本末転倒、少しぐらいわかりにくい話をして危機感を与えよ」なのだそうです。当時はそんなものかと半分疑問に感じていましたが、その真意に気づくには大分時間がかかりました。

本校に転任後数年経って、本校の卒業生の一人が半導体中の電子の振る舞いについてメールで質問してきたことがあります。その質問は当時の私の知識以上のものだったので、お互いにいろいろ調べ、かなり深い思考実験にかかわるメールを交わしました。ようやくお互いが納得できる結論に至った後、その卒業生はこういう話を高校の授業中にもっとしたかったと言うのです。ついつい我々は生徒達の簡単な質問にあつたりと正解を与えてしまうことが多いのですが、そのようなときこそもっと考えさせるチャンスなのかもしれません。

ここ数年、高大連携がらみのお役目を仰せつかることが多く、その任に当たる度に思うのが、今の本校の生徒は本当に恵まれた境遇にあるということです。特別選抜制度もその一つですが、何より東工大の先生方の講義を受けるチャンスが豊富にあることに、羨ましささえ感じます。昔ながらの専門科目の内容が削減されることに寂しさも感じますが、新しい科目や指導方法の開発に取り組むことは本校の使命です。生徒一人ひとりが生き生きと思考できる機会を大切にしたいと考えています。

以上、在学中より現在に至るまでを思いつくまに書き連ねましたが、最近忙しさにかまけてだんだん大切なことを忘れていっているような気がしてきました。この度この原稿を書くチャンスを頂いたことを機に、また新たな気持ちで本校生徒のために努力を重ねる所存です。幸い、生徒の思考や議論を主体とする新しい科目も開発されつつあります。今後ともご支援・ご指導をお願いします。(本校電気科卒)

東京建物見学

― 鳩山会館（旧鳩山一郎邸）の見学会 ―

教育後援会副会長 市村益男

七月二十一日、土曜日。夏休み初日。田町にある附属高校では、中学生対象の体験入学が行われていた。我々は現地に二時前に集合。現役の一年生一人や賛助会員の方々も含めて総勢二八名の参加者であった。講師は元本校建築科教諭で、現在は埼玉大学教授の内田青蔵先生（本会賛助会員）。

日本近代住宅史の第一人者である内田先生の解説はその的を射た説明と軽い語り口で非常に分かり易く楽しく聴ける。以前の参加者の評判も上々である。この日、午前中は大学の学生さんを引率して同所を訪れたとかで、御多忙のところを無理に、のお願いだったのだが、縁の深い本会のためということで快諾していただいたのだ。例年、冬に行われていた建物見学だったが、寒さ嫌いの数人の会員の要望と講師の御都合で、今回は試みに夏にもってきってみた。

有楽町線の護国寺の駅を地上に出て、音羽通りをビルの群れに沿って江戸川橋方向に五、六分歩く。その所在を示す掲示のある鉄の門のところで左に折れ、都心にもこんな坂があるのかと思うような急勾配の坂を、暑さをなだめながらさらに四、五分登る。桜の木々が陽を遮ってくれるが、それも焼け石に水といったところ。恐れていた猛暑日であった。辺りは、大学やその附属校が散在する文京区の中でも取り分けの文教地区である。

この坂を登り切ると今日の目的地である鳩山邸に辿り着く。瀟洒な洋館の車寄せ上方には中央に鹿の頭、両角には飛び立たんばかりの鳩の像が配され、訪れる人を迎えてくれる。民主党幹事長の鳩山由紀夫氏と法務相鳩山邦夫氏（年齢順）の祖父にあたり、首相も務めた一郎氏が大三十三（一九二四）年、関東大震災の翌年に建てたものとのこと。設計は歌舞伎座の設計も手がけた岡田信一郎、一郎の旧制中学以来の友人で

あった。この建物は現在では鳩山会館として一般に開放されている。この建物の特徴の一つは内田先生の筆を借りると、その家名にちなむ「至る所に描かれている鳩。鳩は、古代から平和の、あるいはその繁殖力から、豊饒の象徴として親しまれてきた。とくにキリスト教では、鳩は精霊の賜物の象徴とされ、中世のゴシック様式のカテドラルを彩るステンドグラスのモチーフとして多用されたという。とりわけ、鳩山邸に散見される白い鳩は聖人の魂を意味し、また、日本でも古来から神の使者と考えられていたという。その意味では、平和の使者に取り囲まれた館と呼ぶべきかもしれないのだ。」となる。

この建物のもう一つの特徴はその開放性にあるという。一階に並ぶ応接間と居間と食堂は、間仕切りをはずせば一つの大きな部屋となり、それはサンルームへと拡がり、さらに広い庭にまで通じていく。この開放性は日本の伝統建築の特性であるという。設計の岡田が日本の建築特性を洋館に取り入れたのであろう、と内田先生は推測される。

さらに内田先生の説明は、こうした洋館の様式が、形は変えながらも今日の一般家庭の住まいにまで普及する過程に及ぶ。先生のこのような説明があつて我々の見学会は楽しみが倍加、三倍加する。歴史を知る面白さは時代を俯瞰できることにあるのだろうか。住宅の有り様も歴史的に見ると様々な文化的要素が絡み合っていることを教えていただき、ある種の得心がいき、感動を覚える。この感動がまた次回への期待となるのである。

なお、当日内田先生から御著書「お屋敷拝見」「学び舎拝見」（河出書房新社）の二冊を頂戴した。高校の図書館に寄贈させて戴いた。

（本校元副校長）



2007年7月21日 鳩山会館中庭

旅の空で考えること

教育後援会会長 小池 正一

「旅行」が好きと、「旅」が好き、とでは少し違いがありますね。僕は旅が好きです。スケジュールを組んで、旅館を決めて、効率よく観光しようという気持はありません。

高校に入学した時に、もう四〇年以上前ですが、入学祝をくれるということになりました。何がいいか？と聞かれましたが、特にはありませんでしたので、現金をもらいました。

一万円でした。現在の使用価値としたら、七、八万円位の価値でしょうか。

当然、何に使うにか？と聞かれました。旅行に行くに答えました。東北へ行ってみたいと思ったからです。

高校一年の夏休みに、国鉄（現JR）の東北周遊券を買いました。三千円位だったように思います。仙台行きの夜行列車に乗り、仙台で青森行きの列車に乗り継いで青森の駅に降り立ったのは翌日の夕方でした。周遊券は急行・特急料金は別でしたので、いわゆる鈍行で行ったのです。

駅員に安く泊まれる宿屋を聞いて、青森に一泊しました。翌日は、青森市内を歩き回り、バスで十和田湖へ向かいました。終点の休屋というところで降りましたが、そこには宿屋の番頭さんたちが小さな旗を持って客を迎えに来て、「お泊りの方はいませんか」と声をかけて、客引きをしていました。今は見ませんが、熱海とか伊東とかの駅には客引きの旅館の従業員がいっぱいいて、列車が着くと大きな声で客引きをしていました。

高校一年生の一人旅の僕には、当然誰も声をかけてくれません。旅館に戻っていきそうなのであわてて僕のほうから袖を引っ張って、泊めてくれと宿引き？をしました。引かれた宿屋の人は怪訝そうに、ちよつと怖そうに振り返りました。

食事つき九〇〇円、浴衣五〇円、タオル五〇円と告げられました。よく覚えています。宿屋にいと、食事をして、風呂にはいっ

て、後は何もないですね。当時は、各部屋にテレビなどない時代でしたから。いろんなことを考えて時間が過ぎていきました。自分のことを考えていたと思います。

弘前から新潟、会津若松を経由して帰ってきました。お金の続く限りで。

大学時代は、バイトで稼いだお金で、ユースホステルを中心に日本中を歩き回りました。

大学の最後、就職も決まり、卒業式までの約三週間、ヨーロッパへ出かけました。一人です。親から借金です。

今はない、南回り（羽田→香港→バンコク→カラチ→ドバイ→バクダッド→ローマ→ロンドン）で航空券を買いました。安いのを探したのですが、二〇万円近くしました。

ローマでおいて、そこからロンドンまで、安宿を探しながらヨーロッパの中を旅しました。

旅の中で、列車を待つ時間、バスを待つ時間、列車・バス・船の中の時間、外の景色を見たり空を見上げたりしながらそのときの場所、地方、国によって生活が違うことに気付きます。逆に、自分の持っている常識や生活の変わっているところに気付かされます。

仕事でも何でも、狭い社会関係の中でいつの間にかその社会だけでの常識にとらわれてしまい大きな意味でのコンセンサス（常識と訳すか良識と訳すかどうかの意味もあるのでこのまま）に欠けてしまうことになってしまいます。僕は公務員ですが、「公務員の常識は社会の非常識」という言葉を忘れないようにしています。都教育庁では「教師の常識は公務員の非常識、よって教師の常識は社会の常識」と揶揄しています。

自分を考える、それも今の状況から離れて見つめられる機会は旅というものが作ってくれるかもしれません。そんな旅を子供さんが出来るかと思っています。セキュリティを考えると男の子と女の子とは同一にはいえませんが、遠くの旅の空でいろんなことを考えて見たいですね。

松尾芭蕉の「月日は百代の過客にして、行きかう年も又旅人也、」という言葉は、僕は好きですね。

（本校卒業生保護者）

バザー報告

今年度も文化祭（弟燕祭）期間中の十月七日（土）、八日（日）の二日間にわたって、恒例になりました「教育後援会バザー」を開催しました。盛況のうちに完売いたしました。売上げ金額は、十二万六千六百十円となりました。

ご協力いただいた皆様方に
厚く御礼申し上げます。

（会長 小池）

教育後援会だより 第9号

平成二十年三月一日 発行

東京工業大学附属科学技術高等学校
教育後援会

発行人 小池 正一

印刷所

協和オフセット印刷株式会社

☎〇三（三四三）一六三八